第１部

発達した文明の恩恵の下、日本社会で起きていること

「文明病」の正体

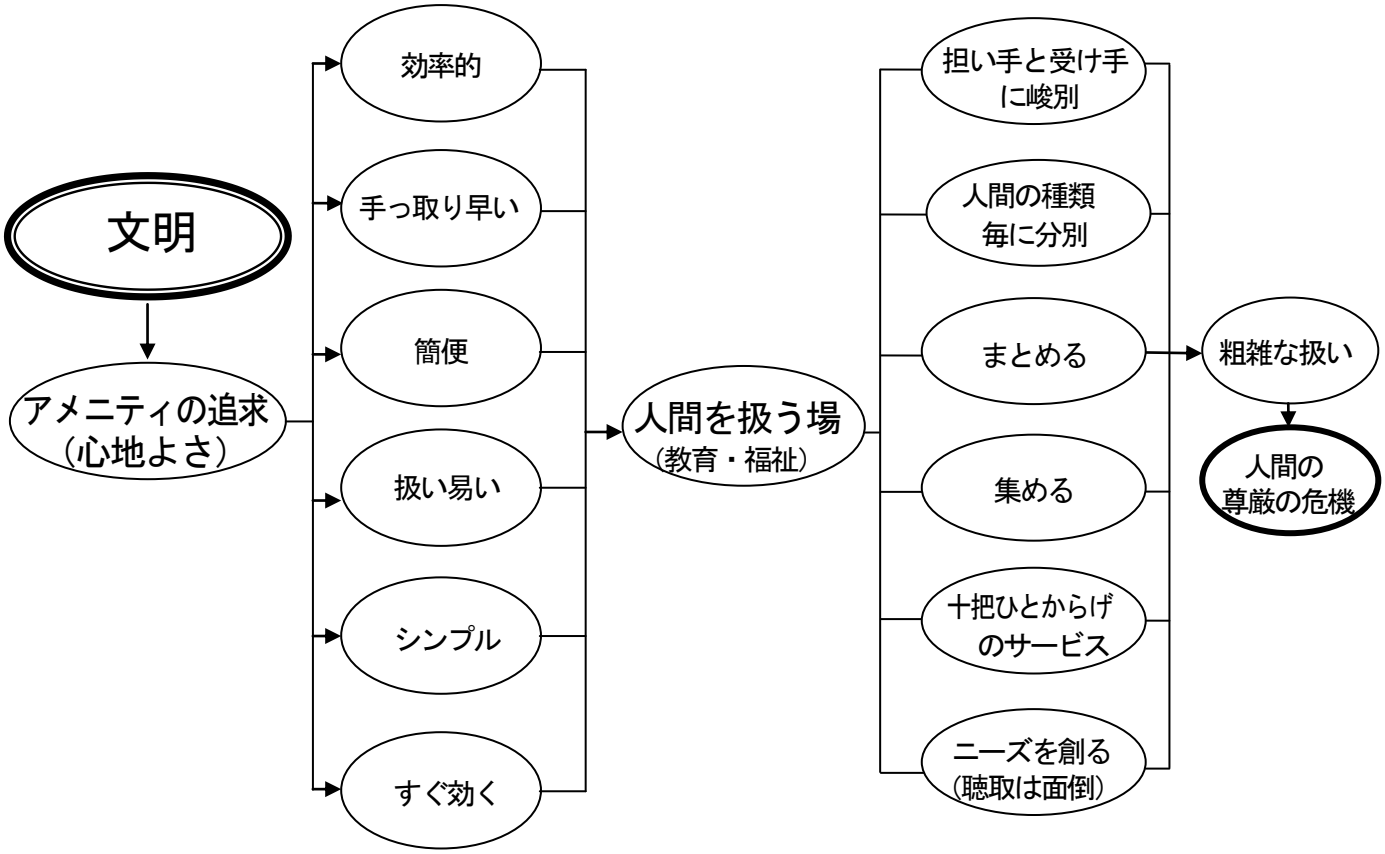
住民流福祉総合研究所

木原孝久

1.文明のどこが病んでいるのか？（要約に代えて）

文明は、私たちが求める「アメニティ」（心地よさ）を実現してくれる。アメニティは、以下のような６項目によって実現される。

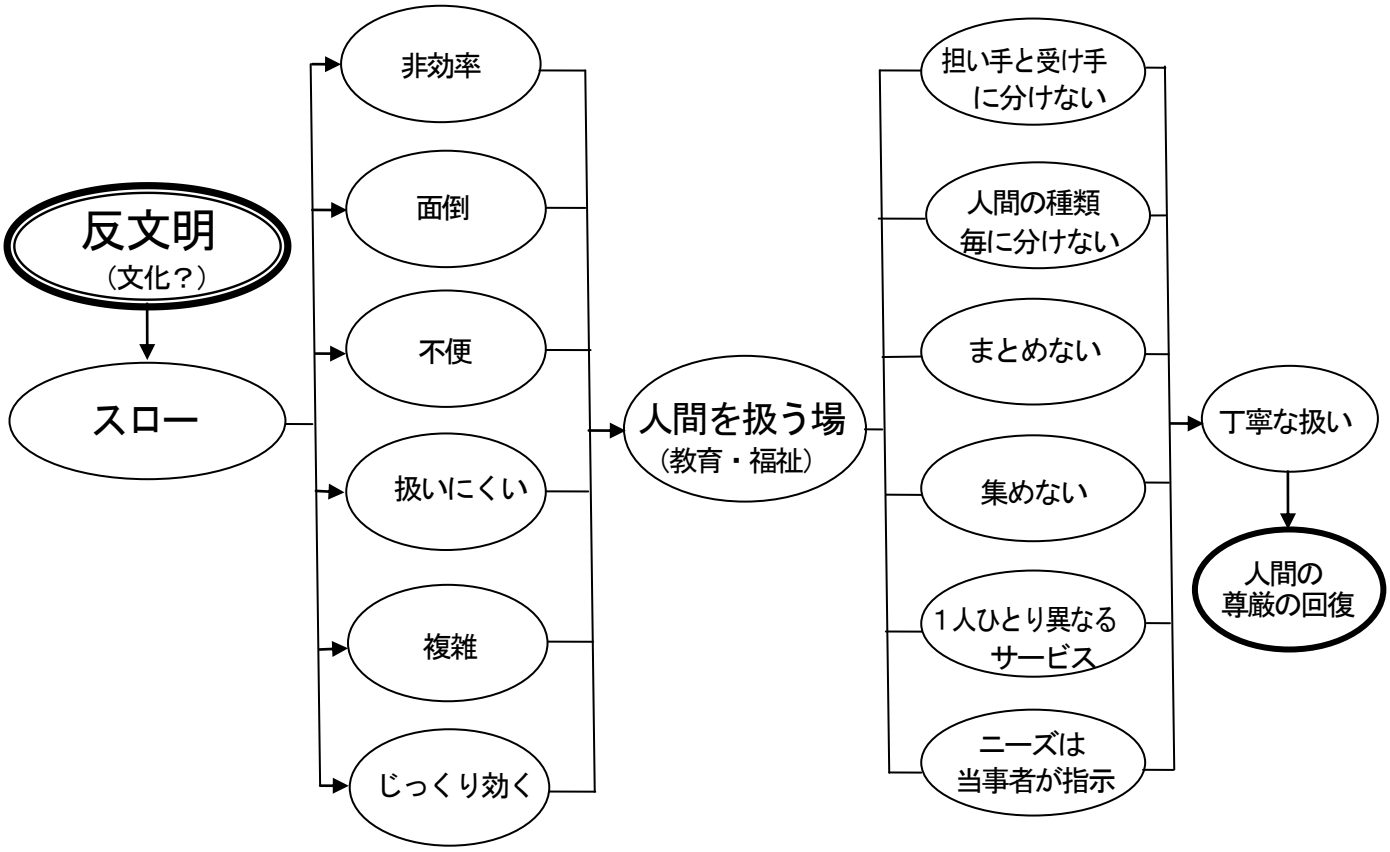
文明は、私たちの生活を心地よいものにしてくれる一方で、人間の福祉や教育の分野でも、同じ手法で関わってくる。以下の図の右側の６項目だ。このやり方を取るとどうなるか。効率を求めるため、人間を粗雑に扱うことになり、文明社会には似つかわしくない貧相な福祉や教育になり、サービスの現場でいじめや暴力がはびこる原因にもなる。ここが文明の病気の部分と言える。文明は意外にも、人間の尊厳を損なう要因にもなるのだ。だから文明的手法は、人間を扱う分野では使うべきではないのである。



2.右手に文明、左手に反文明を上手に使い分け

「スロー」は以下のように、文明とは正反対の世界で、これを「文化」と言うのかもしれない。第２部で、人間の尊厳を取り戻す１２のキーワードを紹介してあるが、その１つに「スロー」を取り上げている。スローは他の項目よりも、もっと重要な意味を持つキーワードである。

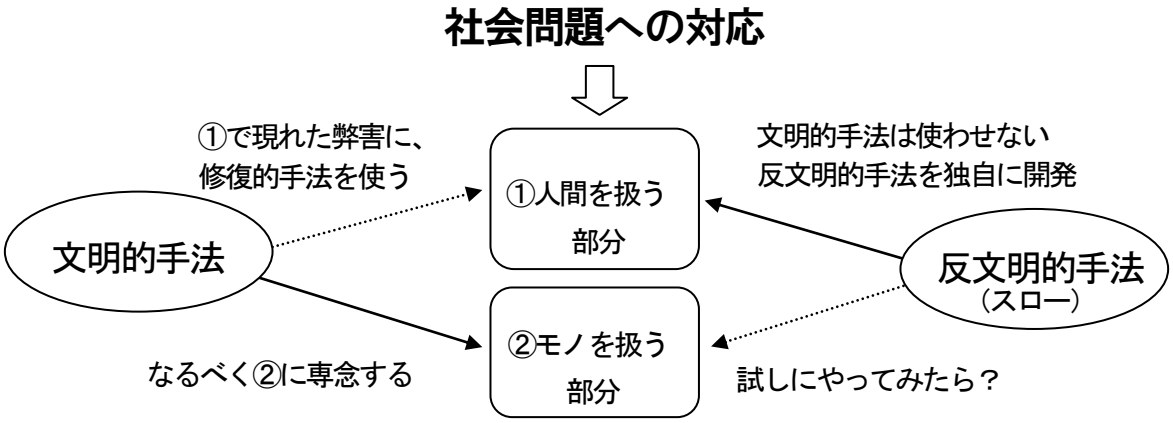
私たちは、アメニティを実現してくれる文明を、生活を豊かにしてくれる面で大いに活用する一方で、私たち人間同士の関わり合いに関する部分では、文明とはちょうど反対の「スロー」でいけばいいのだ。福祉や教育の分野では、以下の右側に並べたような対処法になる。これなら人間を粗雑に扱うことなく福祉を実践することができる。



3.矛盾する両者を兼ね備えた奥行き深い人に

「右手に文明、左手にスロー。上手に使い分けを」などというと、両極端の資質を1 人の人間が持てということだから、ある意味、無理な提案と思われるかもしれない。しかし人間を扱う部分で、文明的手法が意外に生かされることもありうるのだ。

下の図は、今の段階での最もオーソドックスなあり方だ。お互いが文明的手法と反文明的手法を頭の中に入れて、状況によって２つをうまく出し入れすることも、これからは必要ではないか。



目次

要約に代えて／２
1.文明が人間の尊厳の危機を招いた？／６
2.目的実現で科学技術や権力を活用／１５
3.文明は、人間には「両刃の剣」／１７
4.面倒なことは、ハードに頼る／２１
5.人間の尊厳に関わるものは文明から外せ／２６
6.モラルは死に、法律だけが残った／３０
7.人間の尊厳回復をめざすキーワード／３３
8.私の「内なる文明」との闘い／３９
9.「人間起こし」の時代へ／４１
10.「攻めのモラル」を作り出そう／５０

1.文明が人間の尊厳の危機を招いた？

⑴文明がかくも発達した今、なぜ人間の尊厳の危機なのか？

文明が驚くべき発達を遂げている今という時代に、人間の尊厳を取り戻そうと呼びかけるのは、なにか違和感があると思われるのではないか。文明の発達は即、人間の尊厳の実現であるはずだから。しかし現実を見ると、その見方が誤りであることがわかる。

⑵発達している文明と、あまりに不釣り合いなこの光景

たとえばコロナ禍で、新型とは言え、インフルエンザの一種にすぎないのに、世界で何十万人もの人が死んでいる。道路に遺体が山積みという国もあるらしい。道路脇に長い穴を掘り、そこにまとめて放り込まれる遺体を見ていると、大正、昭和期の戦場を思い浮かべる。スペイン風邪の時の新聞記事にそんな写真が載っていたような気もする。マスクがどうとか、人と人の距離のあり方とか、現代のコロナ禍の記事とたいして違わない。私の住んでいる地域でも、一時期、「医療崩壊」などと言われ、病院に入れてもらえない患者が、仕方なく隣接の県に救いを求めて行ったという。これが本当に、人間を大事にする社会が、驚くべき文明発展の末に行き着いた姿なのか、と疑問に思った人も少なくないのではないか。

⑶文明化の時代にまだ小学校に避難所か？

先日、北海道で地震があった後、たまたま現地に出向いたので、「その時」のことを住民に聞いてみた。やはり悩みは避難所。私が聞いた人が行った避難所は外国人でごった返していて大声が飛び交い、トイレは汚れて使えない、赤ちゃんの泣き声やいびきの音もあちこちでする。とても眠るどころでなく、他の避難所に退避し

たと言っていた。

　コロナ禍と災害が重なって、避難所に行くことになれば、三密はどうなるのか。考えなければならないのだが、まさかそんなことはないだろうと、妙な期待を持っている。もしそうなればアウト、という感じである。私が不思議に思うのは、こんな現状なのに、まだ小学校などに避難所を設置する気でいることだ。小学校という避難所が、発達した文明の成果なのか。何かがおかしい。

⑷まだ仮設住宅を作る気か？

阪神淡路大震災を教訓に、東日本大地震の時には「みなし仮設」に避難した人たちがいた。普通の家を借りたということだ。

その東日本大震災の時、仮設住宅の住人に事情を聴く機会があった。隣とはわずか１枚の壁。隣家でトイレを使っている音も聞こえると言っていた。ということは、こちらの音も向こう様に聞こえているということだ。暑い夏の日、東京の息子の家に行って、たっぷり冷房の涼しさを満喫した後、あの部屋にまた戻るのかと思ったら、さすがに足が重くなったと言っていた。

この仮設住宅も、豊かな文明の成果とは言い難く、そろそろ改めるべきではないかという声が出そうなものだが、あまり聞こえてこない。その後の災害でも、相変わらず作られ続けている。

⑸費用は何とでもなることがわかった

　仮設住宅や避難所を改めるとしても、その費用はどうするのかという人もいるだろうが、今回のコロナ禍でわかったことは、いざとなれば費用は何とでもなるということだ。国民１人あたり１０万円を支給することが、たった１日か２日で決まった。１０兆円だろうが、２０兆円だろうが、出す気になれば、国債からいくらでも

調達する。その後はどうとなれという感じである。つまり今は、避難所の改革のためにお金を出す気はないということだ。

⑹一戸建ての避難所もできないことはない

宮崎県の小林市に出向いた時、ある町内会長からこんな話を聞かされた。小林市は宮崎市の西側に位置している。彼はこの地政学的な位置を利用することを考えた。大地震があったら、宮崎市の人たちがこっちへ避難してくる。それを予期して、避難用の住宅を作ろうとしていた。立派な一戸建て住宅である。そう言えば、ある都市圏の自治体は、大災害があった時のために、地方にある空き家を活用しようと考えた。普段の家屋の管理は、一定の経費を払って地元の人たちにやってもらう。この話がどこまで進んでいるのかは知らないが、せめてこの程度のことは考えるべきではないのか。

和歌山県のある町で住民とマップを使って、災害時の避難のことを話し合った。海岸にある地区だから、津波が来たらひとたまりもない。周りを見渡すと、高台があって、そこはいわゆる別荘地だった。普段はほとんど使われていない。企業の保養所もある。この保養所だけで１０数世帯が泊まれる。その高台に福祉関係者が数名住んでいた。いざという時は、何名かは引き受けますよと言っていた。というわけで、この高台を生かせば、住民のほぼ全員の避難が可能になることが分かった。

考えれば、知恵は出てくるものなのだ。大事なのは、人間の尊厳を守るのだという、基本姿勢がぐらつかないことである。

⑺本当の復興とは「焼け太り」のことなのに

この１０年間、東日本大震災の被災地に何度も出向いているが、私の考える復興はまだ実現されていない。１０年たって変わったことと言えば、道路が整備された

ことである。宮古から釜石に行くのに、ほんのわずかな時間しかかからなくなった。復興はただこれだけ。私にはそうとしか見えない。

震災が起きた時、学者などが復興のあり方について、いろいろ語っていた。大まかに言えば、１つポイントがあった。ただの原状復帰では仕方がない。そうではなく、この際、東北を見違えるほどに変えようということであった。たとえは悪いが「焼け太り」という言葉がある。火災に遭ったおかげで、今までのよりも立派な家を建てることができた。生活も改善された。それが復興だと、あの時学者たちは主張していた。私も同感だった。

トヨタなどの大企業が、この際東北に新たに工場を作って、東北の拠点とする、といった構想を打ち出した。これで東北は「僻地」から脱出できるかもしれない。そう思った人もかなりいるのではないか。しかしその後、そんな動きはほとんどない。いまだに東岸に行くのに、盛岡から２時間かけて、誰もいない道路を延々と車を走らせなければならない。

本当の復興とは、「焼け太り」でないと駄目なのだ。本誌ではこれを「フェアネス」というキーワードを使って説明している。東北が変わったなと思われるには、極端な言い方をすれば、リニアがルート変更され、東京から釜石・宮古あたりまでを、一時間もかけずに走り抜けるぐらいの思い切った策が必要なのである。政府の一部を東北に持ってくるという話も、あの頃はあったような気がする。こういうのをフェアネスと言うのだ。やっぱり日本人には、フェアネスは理解できなかった。

⑻認知症サッチャーさんの尊厳ある人生。文明の出番なし

イギリスの元首相のサッチャーさんは、認知症になったが、亡くなるまで尊厳を維持し続けた。ロンドン公園でくつろぐ姿を「パパラッチ」した記者が、ファッションからヘアスタイルに至るまで、一分の隙もなくエレガントで威厳を保っていた

と感嘆したほどだ。

サッチャーさんは認知症になってからも、ブレア元首相にエスコートされるなどして公的な場に出たり、亡くなる前日まで、政治家時代の仲間や部下たちがローテンションを組んで訪問し、政治の現状を報告したりすることで、政治の世界に触れ続けることができた。会話がほとんどできなくなってからも仲間の政治談議の輪に入り、突然、彼女らしい鋭い一言でみんなを唸らせたという。

サッチャーさんが最期の日々を過ごしたとされる部屋
（写真はリッツホテル公式ページより）

ずっと自宅で、「神からの贈り物」と呼ばれるほど素晴らしい介助人の女性が寄り添い続け、最期は「ホテルリッツ」のスイートルームで過ごした。

これが認知症の人の、尊厳を守り抜いた生き方であり、支援の仕方なのだ。文明の成果物である老人ホームの出番はなかった。

⑼文明の発達で人間の尊厳が守られるわけではない

ここで疑問が出てくる。科学技術が発達した今の時代、宇宙のはるか遠くの小惑星に行って、小石を拾って帰って来ることもできる。コロナウィルスで入院している人が、スマホで家族と顔を見せ合いながら会話ができる。こういう面での発達は、本当に華々しいと言ってもいい。こんな文明社会なら、人間の尊厳も間違いなく守られているはずだと思うのが普通だろう。

しかし、私たちは思い違いをしているのかもしれない。文明が発達したということが、そのまま人間の尊厳が守られるということにはつながらないのだ。人間の尊厳を守る、つまり人間を大事にするということが、スマホの進歩で保障されたと思いたいが、それはほんの一部であり、もともと文明がめざしているのは人間の尊厳の保障ではないのだ。

文明には文明自身の意図があって、その意図に従って、日々突き進んでいる。それがたまたま人間の尊厳の実現に寄与する場合もあるだろうが、それは「たまたま」であるにすぎない。

⑽文明は「アメニティ」（心地よさ）をめざしている

では文明が意図しているものとは何か。よく行政関係者がこれからの住民の生き方の指標として挙げるのが「アメニティ」だろう。心地よさ。私たちはたしかに、心地よさをめざしている。それを広く捉えてみると、同じ列にあるものとして、効率的、手っ取り早い、簡便、やり易い、すぐ効く、シンプルなどが挙げられる。それを実現するために、対象を要素別に分別し、それぞれをひとまとめにし、専門の人が集中的に関わる。福祉サービスも大抵、この方式で実践されている。そうやって老人ホームができ、ほとんどが寝たきりの人のためだけの特養もできた。こんなにシンプルで、やり易い方法はない。しかも効率的だ。これぞ文明の成果だというわけである。人間の尊厳が大事なのではなく、効率的でやり易い、シンプルなのが、文明にとっては好ましいことなのだ。

⑾アメニティ追究の成果が「特養ホーム」？

特養ホームのような施設をいくつもつくった、関係者なら知らない人がいない、高名な理事長がだいぶ弱ってきたので、施設長をしている部下の１人が進言した。「そろそろ先生のおつくりになった施設に入りましょうか」。すると突然、理事長はワッと泣き出して、「あそこに入れられるのだけは勘弁してくれ！」と懇願したという。

施設長をしているその人から直接聞いた話である。これでわかる通り、理事長が特養ホームをつくったのは、人間の尊厳を守るためではなかった。それを自らが証

明した。

⑿「文明」の存在は現代人の共同幻想

といっても、よく考えれば、文明が何らかの意思を持っているわけではない。文明の名のもとに、効率とかアメニティとか、手っ取り早さを追求している人間が、結果として人間の尊厳を失わしめているのだ。

文明自体には何ら責任はない。文明という存在があるというのは幻想にすぎない。現代人たちの共同幻想である。

では、本当に自らの尊厳を守りたいという人は、どんな対応の仕方をしているか。私は数十年間、全国の住民のやっていることを、この目で見てきた。その中で驚くことの１つが、一人暮らしで寝たきりの人が、案外いるということである。むろんヘルパーなどにお願いしてはいるが、一国一城のあるじとして、頑張っている。この写真の女性は、寝たきりではないものの、ベッド生活をしている。そこに地域の一人暮らしや認知症の人たちが集まってきて、彼女のベッドの脇で毎日のようにサロンが開かれている。参加者は「(彼女の) 見守りがてら来ている」と言っていた。

⒀人間の尊厳の危機を招く文明に要注意

私たちは、文明の便利さに目を向けるだけでなく、効率や簡便さを求めて、人間を十把一からげに扱う営みの中で、人間の尊厳を危機に貶める部分をきちんと見つけて、そうならないように適切な対応をしなければならないのだ。

１つ例を挙げよう。特別養護老人ホームで職員による入所者への虐待が絶えない。事件が起きるたびに「職員の人間教育を徹底させます」といった理事長の声明で一

件落着にされる。職員の虐待の詳細が新聞などで報道されるが、暴力に加え、認知症の男性２人を対面させてキスをさせ、それをスマホに撮って流すといった醜悪な悪ふざけもある。人間を２種類に分け、一方は強者、もう一方は弱者で、両者を密室で対峙させればこうなることは分かりきっているのだが、そこは無視されている。文明は効率、シンプルをよしとするので、面倒なことは考えないということか。せめて、例えば職員の横暴を抑止するための監視員を配置するといった対策がなぜとられないのか。

⒁文明というハードには、それを修復するソフトが不可欠

対象者を障害の種類や介護度で分けて、それぞれ施設に集め、そこに担い手を配置する。そこまでは担うが、後のことは責任を持たないというのが文明である。この文明を、ハードと考えたらどうか。

これをこのまま実行するだけだと、たとえば虐待の問題が生まれてくるので、何らかの抑止策を講じる。これがソフトだ。監視員を置くとか、ユニットケアといって、入所者が数名ずつのグループで生活をするとか。

学校もしかりで、多数の子どもたちと教師だけの世界。恐ろしくシンプルで、効率的だ。ただし中立的な存在が排除されているため、そのままでは教師が暴力的になったり、いじめがはびこるのは当たり前で、そのためにどういう修復的なソフトを取り入れるかが、必須の条件になるはずなのだ。文明だけでは、危なくてそのままでは使えないと見るべきである。

⒂アメニティとは要するに「楽をしたい」ということ

この際、言っておいた方がいいが、元々「アメニティ」というものは、私たちの生き方を方向付ける理念のようなものとは違うのだ。要するに「楽をしたい」と言

うにすぎず、いくら横文字を使って格好をつけても、それは変わらない。たしかに、楽をしたいという気持ちは誰にでもあり、より楽な生活が実現できるなら、誰でも従うのではないか。だから私たちはほぼ無条件で、文明の指し示す方向に突っ走っている。私たちは皆、文明教の信者なのだ。

「アメニティ」は、いかにも理念のような顔をして、私たちの生き方を方向付けているが、「楽をしたい」という欲求はとめどがなく、誰でもどこまでもこれを追求しようとする。重要なのは、この中で人間の尊厳を危機に貶めるものが出てくれば、それに即対抗しなければならないということである。これが文明との闘いだ。

⑯１２のキーワードは、人間の尊厳を取り戻す手立て

第２部で紹介するが、本書が提示している１２のキーワードは、人間の尊厳を取り戻すための手立てであり、人間復興への１２のシンボルなのだ。そして同時に文明への対抗処置でもある。

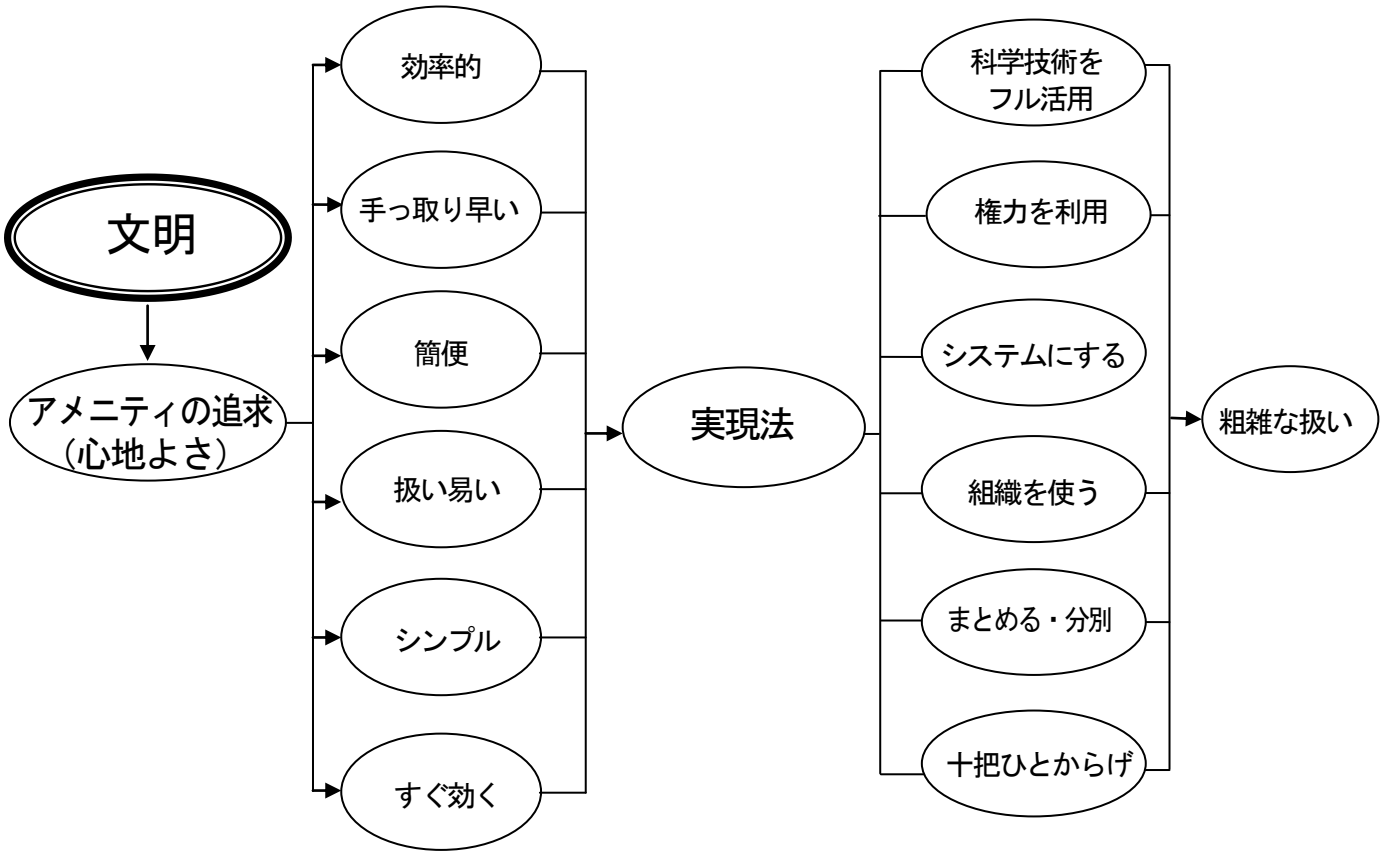
第１部では、文明というものが、私たちが考えている以上に、社会問題を生み出す元凶になっていることを、もう少し述べてみたい。私たちは文明というものの人間にもたらす影響について、楽観的過ぎるのではないか。読者を脅かすわけではないが、これから述べるように、文明には極めて危険な側面があるのだ。そのことをよく心得ておく必要がある。

2.目的実現のために科学技術や権力を活用

文明は、自らがめざす目的（アメニティ）実現のためにどういう方法を使っているのだろうか。下の図を見ていただきたい。

⑴権力の行使はアメニティ志向とつながっていた

まず科学技術の力を使う。これでかなりの部分、目的は果たされる。それ以外だと、権力を活用する。国家権力や自治体等の公権力を使えばことはスムーズに運ぶ。やるべきことをシステムにすると、自動的に事が運ぶ。



組織を使うという手もある。人々を組織化させれば、まとめて指示ができる。その他の部分は、福祉等の人間を対象としたサービスの際に一般的に使われる手法の

一部である。こう見ると、物事を手っ取り早く成し遂げるには、何をしたらいいかが見えてくる。科学技術の活用は当然として、権力を使うのも、１つの方法だった。特に権力を集中させると、より効率よく事が運ぶ。社会主義や共産主義の国家は、こういう主義を掲げながら、要するに権力を１つに集中させることで、国民を効率よく動かそうとしているのだ。

我々がすぐシステムづくりをしたがるのも、物事を効率よく進めるためであり、組織を作るのも同様だ。これらを作って、人をそこに組み込んでしまえばいいのだ。

⑵科学技術も権力も組織も使わなければ、効率は悪くなる

反対に、反文明的手法は、こういうことをしないということだ。科学技術を使わないというよりは、使わなくて済むようなやり方を考える。権力もできる限り使わずに済ませる。人々がそれぞれ自主的に行動したり、集まったりすればそれでいいことなのだから。

組織化も、効率を求める人たちが使う手法で、逆に反文明では、人を組織に巻き込まず、それぞれが自主的主体的に行動するよう求める。となると、たしかに効率は悪いし、すぐに結果は出ないし、いろいろ面倒なことが出てくる。しかしその方が、一人ひとりの尊厳を守ることにはなるのだ。

3.文明は、人間には「両刃の剣」

文明が内包する問題点とはどのようなものなのか。それに対して、どう行動すべきなのか。

⑴犯罪は凶悪化、事故は巨大化

文明は私たちにとってどういう存在なのか、どういう働きをしているのか。私たちを救う存在なのか、または害悪を及ぼす存在なのか。

科学技術をはじめとして文明は急速に発達しているというのに、私たちの社会で起こることを見ていると、本当にその恩恵を受けているのかと疑問を抱く。犯罪は減るどころか、凶悪犯罪はむしろ増えているような感じがする。様々な事故も、巨大事故が目立つ。どういうことなのか。

文明は、それ自体、自動的に人類に幸せをもたらすものではない。それは手段でしかなく、だから逆に不幸をもたらす手段にもなるのだ。

文明はそういうものだと割り切った上で、幸福のみをもたらすようにコントロールする技術を身に着ける必要がある。

⑵科学技術の成果はむしろ悪用化？

たしかに生活は便利になった。パソコンを使えば瞬時に全世界の人と交流することができる。しかしこれを便利と思っているのは私たちだけではない。

かつて我が国でイスラム国に参加しようとして捕まった若者がいる。カナダの議事堂に押し入って銃を乱射したのも、イスラム国シンパだった。彼等はインターネットでイスラム国による巧妙な勧誘を受け、戦地へ渡ろうとして果たせなかった。イスラム国のソーシャルメディアによる全世界規模での若者勧誘作戦はプロも舌

を巻くほどの高度なテクニックを駆使したものだった。

ＩＴ技術の善用と悪用のせめぎ合いは、もしかしたら悪用の方が勝っているのではないかとさえ見える。

私たちはパソコンを操作しながら、その便利さは認識するもののも、一方でそのパソコンで、自分は悪者に被害を受けるかもしれないという恐怖を抱いている。時代の流れを読むと、パソコンの発展は一時期だけで、その後はこれを悪用する側の技術の進化の方が目立つくらいではないか。

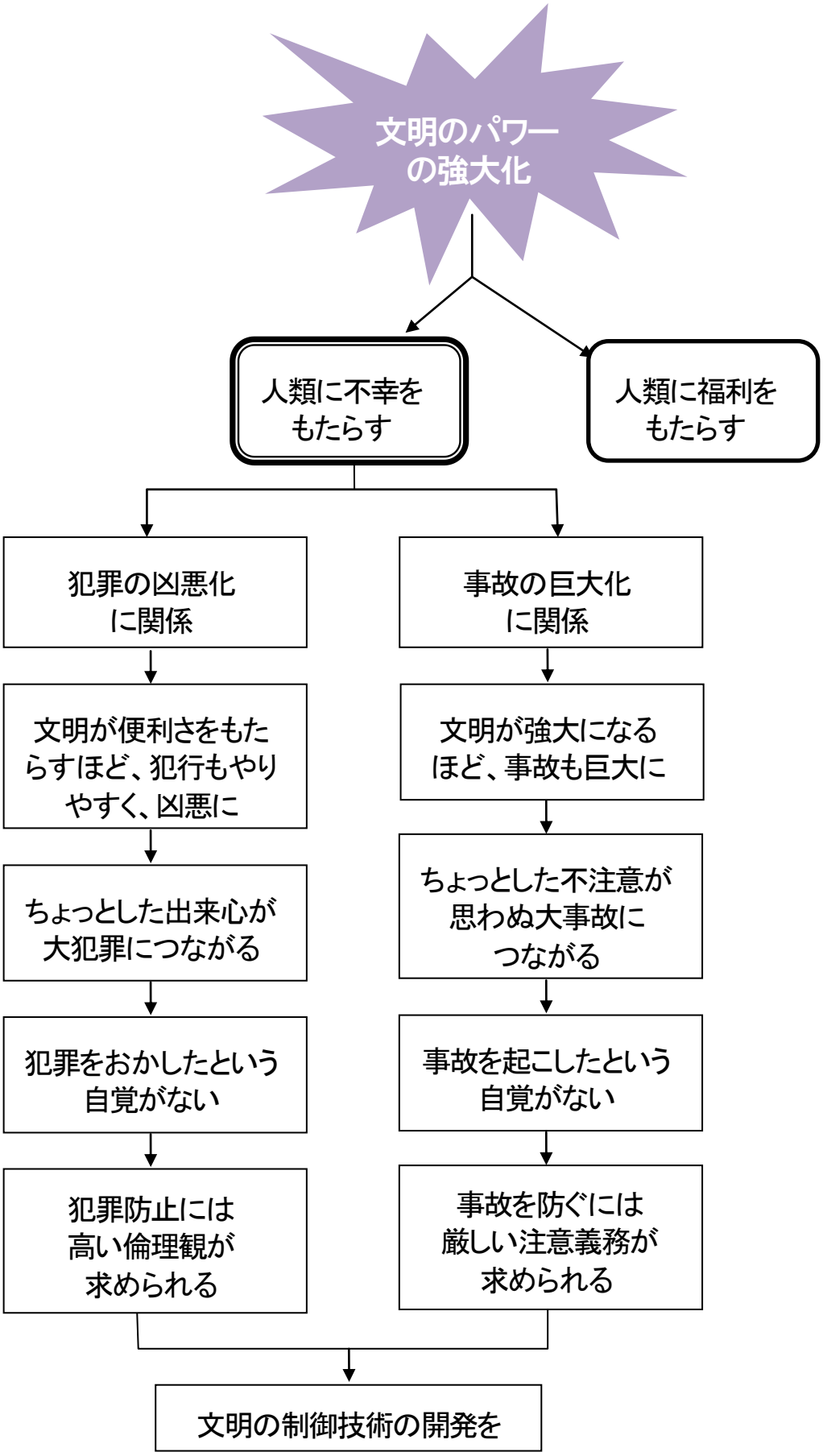
今日の新聞を読むと、防衛相が開発中の新型兵器について、ハッカーに情報を盗まれたと報じている。犯人は中国の２つのハッカー集団だという。人の情報を盗むのも、本格的どころか、確信犯であるところが興味深い。文明に従っている間に、善悪の区別がつかなくなってくるのか。

⑶自分が悪を働いているという実感がない

このように、ハッキングをするにしても、他人の名義で買い物をする犯罪にしても、恐いのは、自分が悪を働いているという実感があまりないことである。文明を利用している間に、どこかの時点で、悪か善かの間がファジーになってくるらしい。「ちょっとした出来心」でオレオレ詐欺を実行している人たちは、いっぱしのサラリーマン気取りでスーツをあつらえ、“カイシャ”へ出勤して老人の虎の子をかすめ取り、とんでもない高額の「報酬」を得ている。

文明のおかげで小悪から巨大悪が育ち、本人は小悪だと思い込んでいる。一見、善人ばかりの社会、じつはその裏で巨悪が跋扈する恐ろしい社会なのだ。

しかしそれは文明の責任ではない。文明は手段に過ぎないのであって、何らかの意志を持っているわけではない。文明は無色透明で、文明自身が悪意を持っているわけではないのだ。



（事故や犯罪を起こさせない）

危険ドラッグを吸って運転し、数人を次々となぎ倒す。本人は大それた事故を起こしたという自覚がない。これが恐ろしい。自分の車で何人かを死なせた加害者は、自分の犯した罪に恐怖するどころか、マスコミに「自動運転が早く開発されるべきだ」と言って、「それはあなたが言うことではないだろう」とたしなめられていた。加害者は、国の高官だった人とも思えない、意識の低さである。そうさせているのが文明なのだ。

⑷ちょっとした出来心も許されないモラルを

文明のせいで大惨事を起こしてしまった人に、深い罪の意識を持たせることさえできない。そういうところが、むしろ怖い。

となると、私たち１人ひとりが、文明のそうした性格を肝に銘じて、高い倫理観を身に着ける必要がある。

「ちょっとした出来心」も大変な惨事を引き起こすのだから、「ほんのちょっとの」出来心も場合によっては許されない―そんなモラルを子どもの頃からしっかり教育し、一人ひとり胸に刻んでいかねばならない。

⑸悪用されそうなら即刻撤退へ

文明を利用しようという人たちは、文明が両刃の剣であることを一時も忘れてはならない。

もしかしたら私はこれを悪用しているのではないか、悪用するのに加担させられているのではないかと、時々振り返ってみる必要があるのだ。もしそうだと分かったら、即座に方向転換して、悪用されている部分の修正をしていく。場合によっては、全面撤退ということも選択肢に入れておく。

4.面倒なことは、ハードに頼ってしまう

⑴快適さと引き換えに失ったものは？

文明のもたらす負の効果について、もう１つ指摘しておかねばならない。人間は便利さ、快適さ、心地良さを求めて文明を発達させてきた。確かにその目的は様々な面で果たされてきたのだが、「計算違い」の部分も出てきている。生活のすべてが心地良くなるということは、どこかがおかしいのだ。

つまり、快適さと引き換えに失っているものもたくさんあるのではないかと推測されるのだ。

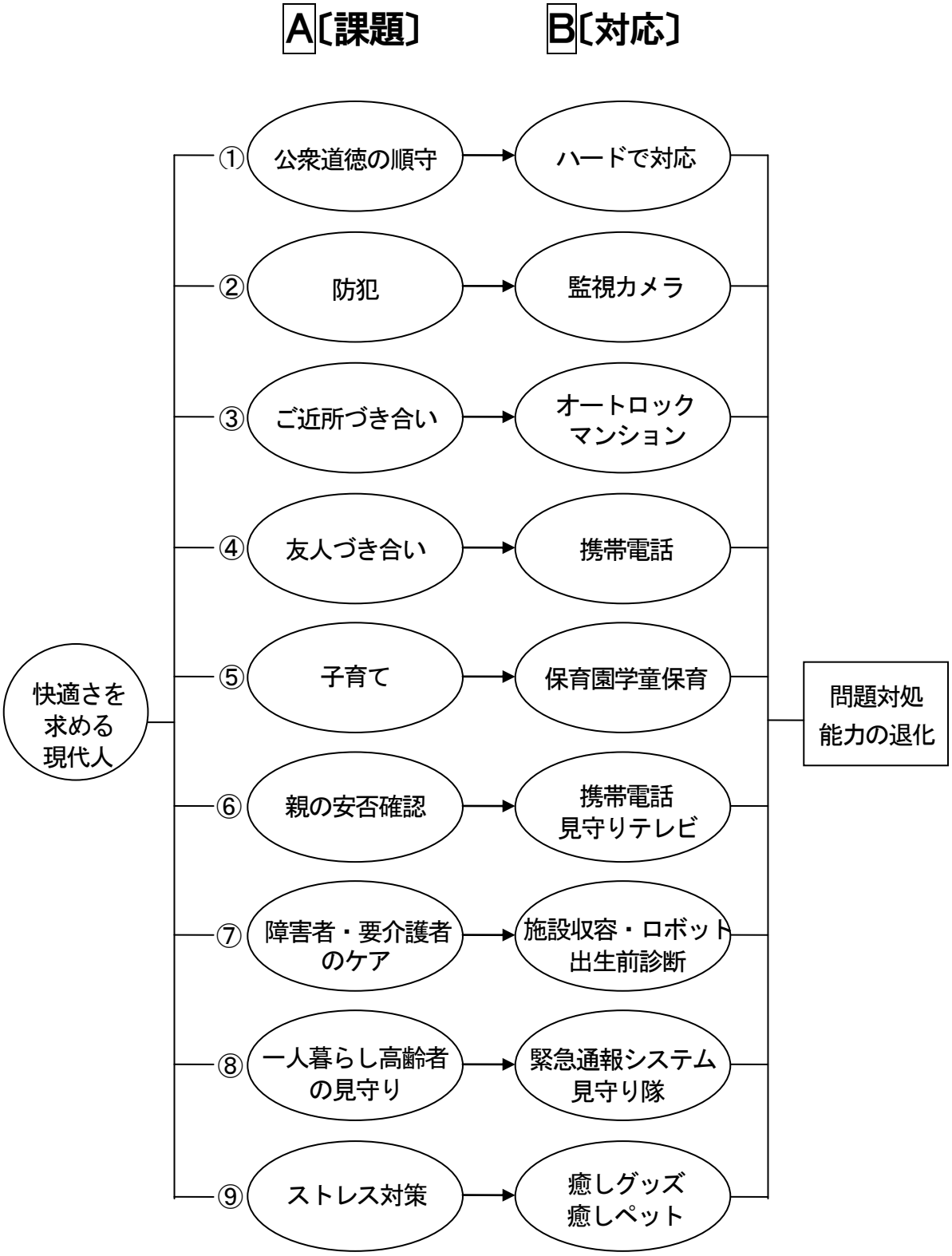
⑵厄介事に人間はどう対応しているか？

具体的な事例を挙げながら、整理してみよう。

次頁の図のＡ列とＢ列は何を表しているか。Ａ列は一般的に言って、人間生活で生じている「面倒なこと」と言える。限りなく快適さを追求しようとすると、ご近所づきあいや友人づき合いは面倒になる。お互いが快適な生活を謳歌するにはマナーを守らねばならないが、それを守らない人がいる。その人にだれが注意するか。同じように防犯も大切だが、これを自ら実践するとなるとやはり面倒だ。

障害者や要介護者のケアなどは、そうした快適さから言えば、極めて厄介なテーマということになってしまう。子育てや介護は、便利さに慣れた現代人を待ち受ける大きな重荷になっている。文明自体が生み出したストレスにどう対処するかも、なかなか容易ではない。

こうした厄介事に、あくまでアメニティを追及してやまない人間は、どのように対処しているのか。それがＢ列に並んでいる。


A〔課題〕
B〔対応〕
快適さを求める現代人
①
公衆道徳の順守
ハードで対応
②
防犯
監視カメラ
③
ご近所づき合い
オートロックマンション
④
友人づき合い
携帯電話
⑤
子育て
保育園学童保育
⑥
親の安否確認
携帯電話
見守りテレビ
⑦
障害者・要介護者のケア
施設収容・ロボット
出生前診断
⑧
一人暮らし高齢者の見守り
緊急通報システム
見守り隊
⑨
ストレス対策
癒しグッズ
癒しペット
問題対処能力の退化

⑶技術やシステムに代行してもらう

まず言えるのは、その厄介事をなるべく人の手ではなく、物や技術、ハード、あるいはシステムによって、代わりに担ってもらおうとしていることだ。

できるだけ自分で担わず、他の人に頼むわけにもいかないとなれば、最後の手はハード、技術ということになる。

例えば、①マナー、公衆道徳。本来ならば、誰かが注意したりすべきなのだが、厄介だ。それよりは、ハードにこれを代行させようということになる。

電車の７人掛けの椅子を６人が占領してしまう。これを何とか７人掛けにさせようとＪＲは様々な手を使った。すべてハードによる手法である。しかし結局、ハード依存によるマナー改善は失敗。７人掛けにさせることはできなかった。

⑷人間の生物学的な能力（本能）が衰退

②の防犯はどうか。これには監視カメラが導入された。いたずらをした子どもの母親が「監視カメラが見ているわよ」と言ったという話もある。しつけも監視カメラにゆだねようという、笑えない笑い話だが、一方の警察の監視能力の衰退が最近、取り沙汰されるようになっている。

オウム真理教事件の高橋某は、カメラが発見した。一方、小池某はついに発見されないまま、死後に判明した。以前は交番の巡査が監視の目を光らせていたが、「監視カメラがあるのだから」と、昔ほど気を張らなくなったのではないか。

ハードや技術に代替させることで、人間の生物学的な能力（本能）が衰退しつつある。

⑸日本人のふれあい力、助け合い力は極度に衰弱

③ご近所づき合いは、快適さを追求する現代人にとって悩みのタネ。そこで登場したのが、オートロックマンション。誰とも顔を合わせずに、快適に住み続けられる。防犯上の効果も大きいと、多くの人が高い家賃を払って住むようになったが、意外な（防犯上の）問題があることがわかってきた。住人が通過する時に一緒に通過してしまえばいいのだ。現代の大きなマンションは住人が互いに顔も知らないので、自分と一緒についでに通過しようとしている人物がマンションの住人なのか、そうでないのか、わからないのである。

最近、あるマンション住民への調査で、「助け合いは必要だと思うか？」という質問に、高い割合で「必要だ」と答えていた。その理由がなんと「防犯」だった。今はご近所同士の交流が全くないために、何か起きたら、警備会社に依頼するより仕方がないのだ。

オートロックなどの快適な住環境のおかげで、日本人のふれあい力、助け合い力は極度に衰弱したと言っていいのではないか。

④友人づき合いも同じようなもので、大抵は携帯電話やメールでのおしゃべりで済ませるようになった。直接的な接触が減った分、やはりふれあい力、助け合い力が弱まっていると見ていい。

この頃、若者がディベートを嫌うようになったと言われている。研修会でグループ討議をさせようとすると、ディベートはせずに、「各自、自分の考えを紙に書いて、出し合いましょう」などと司会者が言い出す。奇妙な風景だ。

⑤子を産み育てることは、快適さを求める人間に残された数少ない試練と言える。子育てに行き詰まって虐待した人の中には、児童相談所が子どもを保護したら、これ幸いと遊びまわるようになったという話まである。

現代は、保育園や学童保育などさまざまなサービスで社会が子育てママを支えて

いる。核家族の時代に不可欠になった、いわば「公的サービス」というシステムによる代行だ。

⑥離れて暮らす親の安否確認も、都会に働きに出てきた人たちにとって、大変な仕事の１つになっている。そこで携帯電話がこれを代行するようになった。これで毎日親の安否を確認している人が少なくない。マホービンやテレビで親の体調などが子のもとに伝えられるシステムも好評だ。

一人暮らしをしている親の元に様子を見に行く人もいるが、親の見守りをしてくれているご近所さんに挨拶に行く人はまずいない。

⑹１２の文明病の治療薬で対処力を磨く以外にない

このようにして、私たちは日々出会う面倒ごとに自ら対処するのでなく、文明の利器を使おうとしているのだが、成果は思うようにならず、却って人間としての問題対処力だけが衰退の一途を辿っている。人間の生物学的な能力、本能といったものも虚弱化している。となると、ますます文明の利器に頼る以外になくなる。

最後はどうなるだろうか。第２部で出てくる、文明病の治療薬の１２項目をもって、可能な限り対処力を磨かねばならないのだ。

5.人間の尊厳に関わるものは文明から外せ

⑴もともと文明は人間の尊厳を守るためには不適

文明、特に科学技術の発達はたしかに、我々がアメニティを獲得するのに多大な貢献をした。しかし、福祉や教育といった、人間の尊厳にストレートに関わってくるものに適用された場合、文明は軽視できない副作用を生じさせている。文明というハードには、その弊害を修復するソフトが欠かせないことが分かった。

しかし、常に弊害を修復するソフト付きでないと使えないということは、もともと文明は、人間の尊厳を守るためには不適だとも考えられる。

⑵教育を文明から外すとは、公教育から離れるということ

ではどうしたらいいのか。人間の尊厳に関わるものは、この際、文明的な方式から外すというのはどうか。といっても、文明は私たちの社会の隅々にまで影響力を発揮している。そんな中で、文明から外すというのが可能なのかどうか。

例えば教育。公的教育は国家（文科省）の手で行われている。国家のやり方はまさに文明そのもの。だから、教育を文明から外すには、公教育から距離を置いたところで行うしかない。

⑶ホームスクールは「学校に馴染めないから家で勉強」？

「ホームスクール」は、家で親が子どもを教える方式だ。アメリカでは広く普及していて、推定であるが、９０～２００万の家庭で行われているという。そもそもアメリカには、「不登校」という言葉がないそうだ。

私たちが「ホームスクールで教育を受けた子ども」と聞くと、マイナスなイメージしか浮かばないかもしれない。「学校に馴染めないから家で勉強した子」「母親が

教えたので学力が不十分」「社会性のない変わった子」―このようなイメージは、ホームスクールの先進国・アメリカでも根強かった。だが、実際にホームスクールで育った子どもたちが、大学や社会で能力を立証することで自ら、そのような偏見を正しつつある。

Wikipedia.org

たとえばＩＴ事業家のジミー・ウェールズさんは、世界中の市民が協働してつくる無料のオンライン百科事典「ウィキペディア」の創設者で、ウィキメディア財団の名誉理事長だ。彼は、母と祖母が教師を務める、たった１部屋の寺子屋のような学校で勉強を教わった。そして現代の「工場のような」学校教育に失望し、自身の娘もホームスクールで教育している。

⑷ハーバード大はホームスクール出身の受験生を積極的に受け入れ

ホームスクールで教育を受けた子と学校教育を受けた子の学力を比較すると、前者は平均的に後者に劣らないか、またはより高い能力を示すという調査結果が複数出ている。面白いのは、「社会性」について同じように調査をしても、ホームスクールで学んだ子の方が高い社会性を発揮する上、問題行動も少ないという結果が出ている点だ。

大学入学後は自立した生活態度や高い学習意欲などが評価され、最近ではハーバード、スタンフォード、マサチューセッツ工科大といったトップクラスの大学が、ホームスクールで高校課程を終えた生徒を積極的に受け入れている程だという。就職後の様子を見ても、米国人材マネジメント協会の広報誌によれば、ホームスクール教育を受けた人を雇用した企業の多くが、熱心に彼等を褒める傾向にあるということだ。

⑸地元の教育者と子どもで集落小学校ができる

高知県室戸市のある集落を訪問した。５０世帯ぐらいの小さな集落である。中心部が高台になっていて、そこに小学校があった。生徒数は６，７名。統合しないのかと聞いたら、住民は「絶対にさせない」と言い張った。この小規模校を何としても存続させるというのだ。「あの上から子どもたちの声が聞こえる、というのはいいよ。それが集落というものなんだ」。

富山県のある集落、やはり５０世帯程度だが、ここで支え合いマップを作ってみた。住宅地図に、住民のふれあいや助け合いの実態をのせていくのだが、そこで次のようなことが分かった。

わずか５０軒程度の中に、子どもがこんなにいる。と同時に、教師経験者が１０人もいた。夏休みには、寺で補習をやっているらしい。

問題は、統合のせいで、小学校がここからはるか離れたまちにあり、子どもたち

は毎日、バスで３０分もかけて通学していることだ。

それなら、教師経験者で集落学校を作ればいいではないか、と私は思うのだが。奄美大島に大和村という８００世帯の村があり、１０の集落から成っているが、以前は、そのそれぞれの集落に小学校があったという。

⑹これは文明でなく文化だ

そのようなやり方は文明的ではなく、その反対である。それぞれの集落ごとに集落学校を作る。それぞれの学校のあり方は全て違う。その集落に、どういう人材がいるかで、学校のあり方から教育のあり方まで変わってくる。効率的ではないし、手っ取り早くない。シンプルでもない。あまりに多様である。こうなると、文明というよりは文化である。それぞれの集落の生き方（ライフスタイル）の一つとしての学校なのだ。

6.モラルは死に、法律だけが残った

文明が発達するとどういうことが生まれてくるのか。文明の良い面だけが目立って、悪い面が陰に隠れてしまう。あまりに華々しい文明のせいで、陰の部分が押し隠されてしまった。ここでは、モラルと法律の関係を取り上げてみたい。

人間の悪事の抑制装置

①個人の心の中の法
（ライフスタイル・信条）
②人間として守るべきモラル
（マナー・公衆道徳・社会常識・良識）
③不文律（不文法）
（慣習・判例などで法と認められた）
④条例
（文章化されているが刑事罰は適用せず）
⑤名目上の刑事罰
（刑事罰を科せるが、絶対に適用しない）
⑥成文法

モラルが有名無実化し、
法律だけが残った

法律に反しなければ、やっていい

法律がモラルに近づいた

みんな守らないから法律にしよう

モラルは死んで法律だけ残った

文明の陰の部分に光を当ててみよう。このごろ、オモシロいポスターが駅に張られていて、思わず足を止めてしまう。「暴力は犯罪です」。モラルを説いているのだ

が、それでは効き目がないので、法律を持ち出した。似たようなポスターがまた張られた。「人をぶっちゃ、いけないんだぞ」。最低のモラルも守られないので、仕方なくポスターにした。

⑴「遺憾なことであるが、法律的には何ら問題はない」

最近は、「〇〇をすると、罰せられます」というポスターをよく見かける。「〇〇をしてはいけません」では効き目がないから、法律を持ち出したわけだ。違反しても、実際に罰されるまではいかないだろうが、一応法律にはなっていることを知らしめる。そうしないと、言うことを聞かないからだ。

政治家も、身内の議員などの問題のある行為を指摘されると、いつも会見で同じことを主張する。「遺憾なことであるが、法律的には何ら問題はない」。

これが進行するとどうなるのか。法律化されていない行為なら、何でもやって構わないという、恐ろしく単純な世界になる。誰も責めないから、つまり責める人がいないから、やりたい放題になる。

⑵文明は、善悪は法律頼みオンリー

この「法律」こそが文明なのだ。一方の「モラル」が文化と考えたらどうか。人間が、自分で自分に縛りをかける部分から、お互いが縛りをかけ合う公衆道徳までは文化。一方、文明が発達すると、形あるもの、分かり易いもの、白黒はっきりしているもの、すなわち法律だけが人を縛る。縛られる本人も納得する。しかしその結果、法律で禁止されない限り、誰が何をしても責められない。こうしてなし崩しに、①②③などが最後の法律制定の段階へ向けてじわりじわりと進行している。

⑶法律に引っかかることだけをやらなければいい

以前は、法律というものは、普通の市民には関係がなく、特別な人がこれに違反して、裁判を受け、刑罰が科せられるというイメージだった。それ以前の行為は、自分自身が、あるいは地域社会が無言の圧力をかけて、思いとどまらせていた。

それが今は、法律以前の行為はすべて、誰が何をやっても責められない。とにかく法律に引っかかるどうかを確認し、引っかかることだけをやらなければいいというのは、極めてシンプルで、いかにも文明らしい。

⑷法でないと人の悪行は抑制できない

しかし法律に引っかからない部分が全て、誰が何をしてもお構いなしとなると、社会の秩序は失われる。これではあまりに困るので、仕方なく法律がモラルに近づいていっている。純粋のモラル以外の部分は、どんどん法律にしていこうというわけである。出来上がるのは、法が支配する社会と言えば聞こえはいいが、法でないと人の悪行は抑制できないということだ。それに、何かちょっと悪いことをすると、すぐに法律によって罰を受けるという、ぎすぎすした社会になっていく。

⑸モラルは結局、法律の次元まで落ちていく

また、「もう少し悪いことをしても違反にはならない」というように、だんだんと法律ギリギリまで悪いことをするようになるから、結果として人々のモラルは落ちていく一方になるのではないか。

7.人間の尊厳回復をめざすキーワード

第２部で紹介する１２のキーワードはそれぞれ、人間の尊厳をどのように取り戻そうとしているのか、特に文明に対抗するためにどんな力を発揮しようとしているのかを表している。

まず第２部で１２のキーワードの内容を理解した上で、本欄を読むという読み方もある。

⑴本人発

「本人が問題解決の主人公である」ことから出発しよう

文明的手法は、対象を担い手と受け手に分け、前者が後者にサービスをする。これなら単純で分かりやすい。だから当事者は、対象者として担い手の指示通りに動けばいいと、つい思ってしまう。今の福祉関係者は大部分、この考えで固まっているから、「当事者主役」がなかなか頭に入らない。人間の尊厳を取りもどすには、ここから始めなければならない。

⑵1人ひとり

私は独特の個性を持った人間だ。私をひとまとめで扱うな

文明は効率をめざす。問題が生じたら、対象になる人と担い手を区分けし、その対象者を分類してそれぞれ集めて、十把ひとからげの扱いになる。1 人ひとりを大事にする、つまり 1 人ひとりの異なるニーズに個別に対応するのが、文明は苦手なのである。効率は悪いし、シンプルでもない、面倒である。しかしこの面倒なことをあえてやるのが、人間復興への道なのだ。

⑶フェアネス

私が抱えたハンデに見合う程度のハンデをつけてもらおう

文明は、効率が大事だから、相手を一律の扱いをすることを好む。この人は障害があるからハンデの法則を適用しましょうなどと言えば、面倒だと嫌われてしまう。そんなことを言い始めたら、対象者の１人ひとりについて、何らかのハンデをつけたり、何らかの修復策を講じる必要が出てくる。フェアネスの発想は、文明に慣れ親しんだ人にはショックではないか。

⑷スロー

助け合うために、迷惑をかけよう、お節介をしよう

文明が効率、シンプル、即効、面倒がない、心地よいなどを追求するのに対して、スローはその反対だ。人間関係でも、ご近所さん同士のお付き合いをし、必要ならば助け合いもする。ご近所で濃密な関係となると、いろいろな摩擦も生じるが、それを避けずに、積極的に問題解決をしていく。文明はこれらの面倒ごとを徹底的に避けて通ろうとするものであり、まさに文明とスローは両極にある。

⑸日陰に光を

皆から疎外されている人・地域を見逃すな

文明は簡単でシンプルなやり方を好む。相手をどこかにまとめ、そこに集中的に資源を投入してしまいたいと思う。その集団から外された（振り落とされた）部分・人にも個別に心を砕くとなると、いかにも面倒である。それをするのが文化であり、避けるのが文明ということになる。

⑹森羅万象

人間だけでなく、樹木も動物も、助け合いの仲間たちだ

現代では、動物のみならず、自然界の全体が助け合いの輪に入っていると言っても、なるほどと思われるほど説得力を持つようになった。

一方、文明は人間中心の世界をつくることに関心がある。そこに鳥とか犬、樹木や水などが登場して、それらが助け合いの輪に巻きこまれているといった複雑で多様な見方には、文明は関知しない。福祉は、今の人間だけのやり取りから離れて、すべての生命が助け合うという世界の中に入っていくことで、人間の尊厳を守る福祉を取り戻すことができるかもしれない。

⑺ポジティブ

すべてをいい方へ考えよう。障害もワルも「力」と見るのだ

文明は、一方通行のシンプルなあり方を好む。だから、その関係が逆転するとなると、混乱してしまう。福祉サービスも、あくまで受け手は受け手の立場を通してもらうのが分かり易いと考える。障害は治療すべきものであり、それがじつは才能だったとなると、対応に困るし、担い手と受け手の関係にも乱れが生じる。しかしその結果、障害のある人や過去に罪をおかした人などが尊厳を取り戻すことができるのである。

⑻全体を見る

良いことをするのも悪いことをしないのも、みんな「活動」だ

今の時代は物事を分析的に見る人が頭のいい人とされている。文明はとめどなく対象を分別していく。そしてその１つに取り付くのだ。だから全体が見えなくなる。

そこで、分別したものを拾い集めて、それらを全体的に見るようにする。ボラン

ティアは、いいことをすること。では「悪いことをしない」ことに意味はないのか。「悪いことをしようとしたが、思いとどまった」のはどうか。「悪いことをしようとする人を思いとどまらせる」のはどうなのだ。こういう、わけのわからない行為もボランティアの中に含め込んでしまえば、これらのファジーな行為をすべて救い出すことになるのだ。こうして、「オレオレ詐欺の受け子になるのを、何とか思いとどまった」という若者も、一種の活動をした人として評価してあげることができる。これが人間の尊厳を守るということではないか。

⑼アマチュア

地域には世話焼きさんという最高の人材がいた！

何か問題が生じたら、その道の専門家を集める。それでだめなら、さらに上の専門家に依頼する。これも文明的手法であり、実にシンプルだ。

しかし時代は変わった。ビジネスの世界では、家庭の主婦が家庭で身に着けた技術で立派に成功している。企業もその腕を生かすようになった。殺人も含めた加害者を裁く立場に一般の人が裁判員として登用され、成功している。素人を敢えて登用しようという流れが生まれている。アマチュア時代の到来である。

住民１人ひとりに立派な価値があることがこれで証明される。「たかが、おばさん」ではない。１人の活動家として評価できる。これもまた尊厳を守ることにつながるのではないか。

⑽ひらく

企業や趣味グループ、老人クラブが持ち前の腕を発揮すれば

文明は効率を求める。そのためには、人材はそれぞれの定められた役割をきちんと果たすことを求める。福祉活動は福祉専門機関やＮＰＯ、ボランティア・グルー

プなどが担い、企業や公共機関などは本来の活動に勤しみ、福祉に関わるとすれば、社員が余暇活動としてボランティアをすればいい、と。

ところが「ひらく」は、福祉活動をどこかの組織に特化するよりも、地域のさまざまな組織がその本来の活動の中で「ついでに」やればいいという発想だから、文明はこれを非効率だとみなすのではないか。しかしこのやり方なら、圧倒的多数の人が、自分の普段の生活の中で人のために活動できることになる。住民皆に価値が出てくるのだ。

⑾さかのぼる

問題が生じる前に備えれば、難問も難問でなくなる

手間がかかることが何よりも嫌いな文明にとっては、いちど時間軸を動かして、問題が起きるずっと前にまで遡ろうということはしない。事実、この「さかのぼる」ということをやる人は、なかなかいない。やろうと思えばできるのだが、結局やらない。だが本気で難問を解決しようとするなら、必ずその問題が生まれる前まで遡り、対策をとらねばならない。これに取り組むということは、本気で根本的な解決をめざしている証拠なのだ。

⑿権力の抑止

問題解決策の中で、力のバランスが崩れないようご用心

文明は効率を求めて、場合によっては強権の行使、権力の集中も厭わないという姿勢のようだ。そのために、その権力が暴発し、被害をこうむる人が出ても仕方がないというぐらいにしか考えないのではないか。権力の暴発の結果、被害者が出ても、あるいは死者が出ても、効率的なシステムを維持することに比べれば、それほど重要とは思わない。現に老人ホームや小学校、あるいは家庭で被害者が出ても、

関係者は、それほどひどいことをしたという顔はしていない。マスコミのカメラに向かって頭を下げれば、許されると思っているように見える。

文明というのは、正義とか、人権といった概念には、あまり関心がない。もしそういう概念があれば、文明がもたらしうる大災害や凶悪犯罪を防止するためにもっとエネルギーを使うはずだが、それよりも、効率やアメニティなどに関心があるのだ。

8.私の「内なる文明」との闘い

⑴１２のキーワードは文明に対抗する意図を持つ

本書は、１２のキーワードを使って、現代の社会・福祉の問題の解決策を考えようという趣旨でつくられた。一方で、現代の社会・福祉問題の多くは、文明が生み出したもので、それに対抗するには、反文明による以外にない。だから、提示した１２のキーワードはいずれも、その文明に対抗する意図を持っている。

⑵読者自身は文明の信奉者になりきっていないか？

ここまではいいとして、これから読者がこの１２のキーワードを使って問題の解決策を考えようという時、まず問われるのは、読者自身が文明の信奉者になりきっていないか―つまり距離を置いて考えることができるかということである。だから、自身の内なる文明を振り返って、そういう資質の自分が、どのようにして適切にキーワードを使おうとするのかと考えると、ある意味で矛盾に満ちた行為をすることになる。

⑶あなたの「内なる文明」と１２のキーワードとの闘い

１２のキーワードの大部分は、文明が好まない方向に導くものである。当然、あなたの「内なる文明」も好まないから、あなたとキーワードは真正面から闘うより仕方がない。それでも敢えてキーワードを用いることにして、問題を料理しようとするか。

こういう闘いなのだということを自覚しないと、キーワードは使ったが、そこに含まれる反文明の意図は無視して、またはそれに気づかずに、解決策を紡ぎ出すことになるかもしれない。そこでどんな解決策が出てくるか。文明と反文明の折衷案

などというものがあるのかと言えば、おそらくはないだろう。結局、混乱した解決策にならざるをえない。

⑷解決策を考える作業に移る前にすべきこととは？

だから、解決策を練る前に、まず１２のキーワードを頭に入れ、そのキーワードは文明のどんな傾向と対決しようとしているかを、この章で確認してから、解決策を考える作業に移ればいい。

とはいうものの、この作業はなかなか難しい。例えば福祉関係者がこれにチャレンジした場合、頭の中は、文明的なやり方で既に固まっているのではないか。福祉の世界は、弱者を相手にしているから、手っ取り早い文明的なやり方が使われやすい。対象を担い手と受け手に分け、担い手が受け手に関わる。対象を分類して、それぞれの対象者をまとめて、どこかの施設に収容するといったことを、割と安易にやってしまう。対象は弱者だから、抵抗も少ない。最もシンプルなやり方が使われやすいのだ。

9.「人間起こし」の時代へ

⑴アメニティを追求すれば人間を粗雑に扱うことになる

文明の意図していることと、人間の尊厳を守るということには、ずれがある。文明はとにかくアメニティ、効率、便利、手っ取り早い、即効といったことを追求する人間の欲求に応えるもので、それを追求すれば逆に、人間を粗雑に扱うことになる。これが問題なのだ。人間を効率よくさばこうとすれば、特別養護老人ホームが出来上がる。

アメニティとか効率というものは、もともと人間の生き方に方向付けするようなものではない。要は、楽をしたいということだ。そして文明はそれに応えてくれる。

⑵学校は効率的でシンプルだが、いじめや暴力を防げない

それより問題なのは、人間を粗雑に扱うという点である。いじめの問題にしても、子どもという弱者と先生という強者だけを学校という特殊な場に集めて、後者が前者に関わる。まことにシンプルで効率的だ。

しかし文明は、ここからどんな問題が生まれるかは考えていない。いじめや教師による暴力が発生することは、目に見えている。いじめが起きても、誰もそれを防ごうとはしない。子どもも傍観者どころか、共犯者になる。そうやっていじめ自殺が起きても、だれも責任を取らない。

老人ホームもしかり。そして、問題が起きてからの処理の仕方を見ると、本当に人間を大事にしようという気があるか疑わしい。

児童虐待の問題にしても、明らかに虐待が行われているにもかかわらず、児童相談所はその家に入れなかったり、表面的な関わりしかできない。周りの人たちも、何の手も打たない。そうやって、みすみす救えそうな子どもたちを死に追いやって

いる。

今のような死亡事故を何度も見せられ、そのたびに誰もそれに責任を取らないこともわかった。こうしている間に、私たちは人の死に無感動になってきている。

⑶社会問題に誰が本格的に取り組んでいるのか

ここが理解できないのだが、いま社会問題になっていることについて、それに誰が本格的に取り組んでいるのかが分からない。どこかで研究はしているのかもしれないが、社会の前面に出てこない。私たちが知るのは、ＮＨＫとか、大新聞の特集でだが、マスコミが１人か２人の研究者や評論家から意見を聞く程度で、どう考えても、本格的に専門家たちの知恵を結集して出てきた結論とは言えない。そうやって、いじめの問題が出てくるたびに、同じような議論がなされていて、それで終わりだ。

私自身、主に福祉問題でテレビ番組に出演して、一緒に番組を企画したりもしたが、番組を作る側の人たちには、この際この問題を徹底的に議論して、問題解決のヒントまで出そうという意気込みは、残念ながらたったの１度もなかった。とにかくオドロオドロシイ事例を並べて、視聴者をびっくりさせ、さてこれからどうするのかという所で、番組はおしまいだ。だから、出演はしたものの、いつもはぐらかされるだけである。

⑷手っ取り早い解決策は困る。多角的な取り組みが不可欠

日本という社会は、起きている問題を真剣に解決しようとしているのか、極めて疑わしい。もし各種の研究機関が本当に専門的に研究しているというのなら、それらを結集して、決定的な答えを出すべきである。

コロナ禍に関しては、社会全体が必死になっているから、この辺りがうまくいっ

ているようだ。政府が主導し、学者たちが委員会を作って研究し、加えて、私たちがどうすればいいのかまで、分かり易く説明してくれる。その行動の結果が毎日のテレビで報告される。私達の努力が、そのままグラフに現れる。コロナ禍という問題に対して、政府と学者とマスコミと自治体が協力して、難敵に挑んでいる。こういうふうに、いじめや児童虐待などの問題なども、やっていけばいいのだ。

私は私なりにその答えを本誌で提示している。中身はともかく、いじめの問題ひとつをとっても、１つや２つの解決策ではどうしようもない。学校のあり方、地域のあり方、生徒と学校との関係など、多角的に取り組んでいかねばならないことは、間違いないのだ。

⑸１２のキーワードは、ますます実現不可能に

私は福祉関係者であるが、福祉機関も、文明の流儀に完全に乗ってしまっている。対象者を分類し、まとめて、どこかの施設に収容するとか、市のセンターにいたままで福祉ニーズを推測し、そこで手っ取り早くサービスを作ってしまい、欲しい人はこっちへ来なさいと呼びかけるとか。手っ取り早くて、やり易い。当事者の本当の声が聞きたいと、当事者が生活しているご近所にまで出かける関係者はいない。

⑹人間の尊厳を守れる社会づくりの課題

では、人間の尊厳を本当に守れる社会をつくっていくには、どんな課題があるだろうか。じつはそれが、１２のキーワードに詰め込まれている。

①人間の尊厳を考える機会をもつ

１つは、人間の尊厳とはどういうことなのかと考える機会を持つこと。私は学生向けの「高校・大学生のための考える福祉」という冊子をまとめた。特に高校・大

学生のためにまとめたのは、これが福祉を根幹から考える最後のチャンスではないかと考えたからだ。実際に福祉の職場に入れば、そういうことを考える機会はなくなる。業界関係者は、問題の手っ取り早い解決策ばかりを追い求めている間に、問題そのものを深く掘り下げることができなくなってしまった。というよりも、掘り下げる気がなくなっている。

②「寝たきりの俺を畑へ連れて行ってくれ」

以前、高齢者の尊厳を守るための福祉、といった研究会が厚労省内で設けられたように聞いているが、まだ本格的に研究されている気配はない。福祉が文明化されてから、福祉は困ったことを解決してあげればいいといった、単純な考え方で関係者の頭が固まってしまった。

厚労省が、１つだけいいことを言っている。福祉とは、どんなに重い要介護になっても、住み慣れた家や地域で、安全かつその人らしく生きていけるように支援することだと。重度の要介護になっても、最後までその人らしく生きていきたい、つまり自己実現の応援をしなさいと言うのである。「俺は長い間、畑を耕して生きてきた。今寝たきりになったけど、それでも俺を畑へ連れて行ってくれ」と言われたら、連れて行くのである。

③認知症の女性が踊りの教室の講師役

岩手県の被災地であったことだが、認知症の母親を２人の娘が介護している。２人とも看護師なので、その方面は安全なのだが、窓に目張りをして、引きこもり状態だという。母親は以前、何かしていなかったかと聞いたら、踊りのお師匠さんだった。そこで彼女を招いて、踊りの教室を開いたらどうかと呼びかけたら、反応した。講師として踊りの場に招かれたその女性は、１０人の受講生を快く教えてくれ

た。その後も、地区で踊りが催される所に出かけるようになった。尊厳を守るということは、こういうことである。そしてそれを実践すれば、本人にも変化が生まれる。

④障害はじつは能力でもあった

尊厳を守るには、福祉のレベルを思い切り上げる必要がある。とともに、今の話のように、本人つまり受け手の人を担い手の側にすることも大事だ。天井のシミが気になるという自閉症の人が、印刷所で働いている。彼の障害が、印刷物についたシミを瞬時に発見できるという才能に代わったからだ。欧米では、ハッカーを企業や政府が本気で雇うようになった。悪もまた生かし方によっては力になる。こういうポジティブな見方もまた、人間の尊厳を証明するものと言える。

⑤本人が尊厳を守ろうという姿勢になること

次いで、当事者本人が自分の人間としての尊厳を守ろうという姿勢になることである。福祉サービスの主体は担い手であって、当事者はそのサービスを受ければいいという考え方が定着してしまい、当事者は、自分は何もしなくていいと思うようになっている。

私が今すすめている運動の柱は、当事者が主体者としてどう行動するかである。自分の安全を守るために何をしたらいいのか、人に助けを求める法とか、自立訓練とか、やるべきことはたくさんある。とにかく当事者が自分の福祉は自分が主導して進めるのだという意識改革ができるまでは、尊厳ある福祉は実現しない。他人は所詮、他人である。自分のことを心底、真剣に考えるのは、自分自身だけなのだ。

⑥当事者主体の本意を理解する

次いで、福祉は当事者主体だということを、担い手側が認めること。というよりは、当事者主体が本当はどういうものなのかをきちんと理解する。１２のキーワードの「本人発」をよく読んでいただきたい。ある福祉関係者が私に「当事者主体なんて、とっくの昔に実現している」と言ったので、驚いた。その人が考える当事者主体は、よほど些細なもののようだが、そんな簡単に言ってもらっては、当事者はいつまでたっても救われない。

⑦尊厳を保障してくれる地域社会を作らねば

次いで、人間の尊厳を守るには、まず私たちの社会は、昔はどうなっていたのか、それが今どのように変わっていったのかも理解する必要がある。

今の社会はどうしてこんなにいろいろな事件が起きるのか。起きる背景があるのだろう。孤独死、児童虐待、母子心中、家庭内暴力、いじめ、介護殺人、息子の老母への虐待、未婚の男性とその高齢化、一人暮らし高齢者、老老介護、老人施設の虐待、限界集落・消滅集落―これらはほとんど１つの事実から出発している。「地域崩壊」である。地域が崩壊してしまったという言い方がされているが、それは間違いで、自分たちが地域を崩壊せしめたのだ。

自分を守る、家族関係を守る、親族関係を守る、ご近所関係を守る、ご町内を守る―それらを放棄した結果として、誰もかれもが無防備になり、上記のような問題が必然的に生まれてきた。その代替策を考えないまま、現在に至っている。

旧来のやり方は、あまりいい方法ではなかったかもしれないが、それでもこれほどの問題を生み出さずに済ませてきた。武家社会では、家が代々続いていくことが絶対の条件だった。嫁に子どもが生まれないと、それこそお家の一大事。嫁を離縁させたり、別の女に子どもを産ませたり、必死に御家断絶を防いだ。

無茶苦茶ではあるが、そうすることで、家族や親族、ご近所が安泰になり、さまざまな問題が噴出するのを一応は防いだ。そんな旧来の風習を全部捨て去ったのはいいが、問題は、それに代わるための何の手も打ってこなかったことだ。壊すのは簡単だが、作るのは至難の業で、それを怠ってきた。ついでに、お互いが社会生活を安全に送っていくためのモラルも、戦後気前よく捨て去ってしまった。文明の教えるアメニティ、要するに楽をしたい、面倒なことは嫌い、人間関係も嫌いという志向だけが国民に浸透した。

今「スロー」という言葉でシンボライズされている生き方を一言で言えば、文明が進む中で失われた価値を、もう一度取り戻してみようということだ。そうしながら、その間に、今の時代に即したライフスタイルをつくっていこう。家族関係のあり方も、ご近所づくりのあり方も、社会生活のモラルも、少しずつつくっていこう、ということである。

⑧人間の尊厳を守るには、力のある支援者が必要

人間の尊厳を守るには、力のある支援者がいなければならない。たとえば京都府舞鶴市にある高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」では、知的障害や精神障害のある人たちが働いているが、「支配人」である西澤心さんが並外れた情熱とパワーを発揮して、「福祉の店」の常識を完全に覆した。舞鶴湾を一望できる一等地に、２億５千万円の建物、そしてグルメファンに名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。

福祉といえば、はっきり言えば、「普通より少し下」くらいの水準でいいと思われてきた。しかしハンディキャップがあるからこそ、このような「普通より高いレベル」の資源の投入によってはじめて、障害者は人間としての尊厳を保障されるのだ。このようなやり方をする人が、最近少しずつ増え始めている。高いレベルの福

祉を実現させるのは、彼のような高いレベルの人材である。そういう人たちにどしどし福祉の世界に入ってきてもらわねばならない。一方で、「困っている人を見つけたら、その人に関わるまでご飯が喉を通らない」と言う地域の世話焼きさんを、もっと活用しなければならない。ところがなぜかこの世話焼きさんを登用するのを関係者は嫌う。専門家ではないからだ。こんなところにまで、文明の弊害が及んでいる。

⑨難題の解決には、時間軸を動かすことも

その他にも、難題については、時間軸をずらして対策を考えなければならない。つまり問題が起きる前まで遡るのだ。川崎市で自宅開放型の「影絵児童館」をやっていたK子さんを１０年ほど追跡取材したことがある。そこで見えてきたのは、K子さんのような人を「全開き」とすれば、あと「半開き」が２，３名、「小開き」が１０数名いて、この人たちがネットを組むことで、「子どもたちに何かあると、みんなが飛び出す」地域になるという。ちょっと問題のある子は、この小地域ごとに張られた、目の細かい網には引っかかってくる。引っかかったから、その子の問題がすぐに良くなるというわけではないが、「今以上には大きくならない」とK子さんは言っていた。もしこの網がなかったら、社会に張られた、目の大きな網（警察の少年課とか保護司、主任児童委員、防犯協会など）には引っかかってくるが、その時には問題が大きくなり、ほとんど改善不可能な状態になっている。もし主婦たちの手で、地域のどこにもこの小さな網が張られていたら、いずれはワルになる子、いじめっ子がこの網の中で、これ以上大きくならないで育っていくのではないか。

⑩助け合いはその関係の人がやればいい？

今のわが国で、自分の生涯のいつか、どこかで、「困っている人がいたら積極的に手を差しのべよう」という教えを聞かされることがあるだろうか。福祉教育という教育分野もあるが、ほとんど実践されていない。施設訪問や車いすの体験程度である。子ども時代からそういう基本的なことを教えられずに大人になるこの社会で、国民にいきなり助け合いを期待するのは、無理である。

そういう教育を今、日本という国は、ほとんど行っていない。やさしさとか助け合いは、自分たちには関係ないという国民がほとんどではないか。相手が障害のある人や要介護の人になればなおさらで、遠目に見ているだけで、関わる人はいない。そういうことはその関係の人がやればいいと考えている。福祉や助け合いは、いまだに特殊な人たちの特殊な営みになっている。

⑪尊厳を奪われている人を見逃さない

ロシアで開かれたオリンピックに参加したアメリカの選手たちが、現地でさ迷っている野良犬を保護して本国に連れ帰ったという。困っている人を見逃さない、のこれは応用問題だ。日本人の私なら、とにかく競技または観戦に熱中する。その熱の冷めないままに帰国する。それだけだ。

同じアメリカの話だが、ＩＴ会社に勤めるパトリック・マコンログさんという若者は、出勤途中に公園で見かけるホームレスの男性・レオ・グランドさんのことが気になっていた。いつも本を抱えて書き物をしたりしていたグランドさんに、マコンログさんは歩み寄り、こんな提案をした。「１００ドルのお金か、または中古のパソコンと２ヶ月のプログラミングのレッスンを提供するのと、どちらがいいです

屋外での授業風景―左がグランドさん、右がマコンログさん
（Today News）

か？」。グランドさんは、迷うことなく後者を選んだ。

そこで出勤前の１時間、公園でプログラミングのレッスンをすることになった。目標はアプリの開発だったが、予定期間には終わらなかった。それを知ったマコンログさんの会社が、「勤務時間中に、会社の部屋を使っていいから、最後まで教えなさい」と提案した。環境保護のために何か貢献したかったグランドさんは、カーシェアのアプリを開発し、それでかなりの収入を得られたということだ（Today News）。

10.「攻めのモラル」を作り出そう

⑴ふれあいも助け合いも面倒？

現代の私たちは、ふれあいや助け合いなど面倒なことに関わるよりも、文明が次々と生み出す新しい便利なものに興味を惹かれる。まだそれを使いこなせないうちに、次の面白い物が作られる。急いで使いこなさなくっちゃ。そっちの方に目が向いたままだ。

⑵人間と人間の関わり合いの中で、尊厳が実現する

人間の尊厳を守るためには、まず１人ひとりが自身の尊厳を意識し、それを守ろうという意思を持たなければならない。次いで、相手の尊厳も傷つけてはならないと強く思わなければならない。尊厳を守るのは、システムでもなく、ハードでもない。文明でもない。これこそ、人間自身が相互にその気にならないと駄目なのだ。

人間と人間の関わり合いの中で、尊厳が実現する。あとで紹介する、人間の尊厳を実現するための１２のキーワードも、要はそれを私達が助け合いや福祉活動の中で、どれだけ使いこなせるかにかかっている。その私たちの資質が結局は問われる

のだ。

⑶人間起こしの基盤になる、新しいモラルを作り出そう

人間起こしとは、そういう尊厳の実現を意識した人間をつくり出していくということだ。自分を大事にし、相手も大事にする。そのために、直接ふれあうことで相手に関わっていく。そうすることが、人間の尊厳を守ることに、最終的にはつながる。そういう人間を新たに創っていく。これを人間起こしと言ったらどうか。その基盤になる、新しいモラルを作っていかねばならない。

⑷日本人のやさしさは１２５カ国中の１２５位

イギリスのチャリティ・エイド・ファンデーションという団体が世界１２５カ国でこういう調査をした。「あなたはこの１ヶ月で、知らない人を助けましたか？」。結果は、日本は１２５カ国中、１２５位だった。

興味深いのは、私がこの結果についてどう思うかと聞いてみると、多くの日本人が「まあ、そんなものなんじゃないの」と言うことだ。前からこんなものだと分かっていたというのだ。日本人のやさしさは受け身であるとか、身内なら助ける傾向があるとか、お国柄、いくつか考慮すべき要素はあるが、やはり１２５位というのは、それだけとは言えない。これも面倒なことを避けてきた弊害の１つではないか。

⑸「あなたのおつき合いの流儀は？」

私は講演などを行う時、いつも参加者に以下の質問をぶつけている。「あなたのおつき合いの流儀は？」というもので、１０項目あるから、それぞれについて「自分もそう思う」なら○印、そうは思わないなら×印をつけてもらう。

❶自分や自分の家族のことは隠しておきたい ……… □

❷自分のことがご近所で噂されるのはイヤ ……… □

❸人に助けを求めるのは苦手だ ……… □

❹人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない ……… □

❺人のことはなるべく詮索（せんさく）しないようにしている ……… □

❻誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている ……… □

❼困っている人にはお節介と言われない程度に関わる ……… □

❽引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない ……… □

❾お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う ……… □

❿隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている ……… □

⑹これらは日本人のおつき合いの「常識」

結果を挙手で答えてもらうと、多くの人は１０のうち７つから９つほどに〇が付く。それもそのはず、これらは日本人のおつき合いの常識なのだから。〇が多い人は、日本人としては常識人と言える。〇が少ない人は非常識な人ということになる。

ただし、常識人、つまり〇印が多い人は、「助け合いはしたくない」と言っているのと同じなのだ。なぜそうなるのかを、これから簡単に解説していくが、一言でいえば、私たちのおつき合いは、双方に困り事が生じないという前提で成り立っているということである。おつき合いはおつき合い、助け合いはまた別の場で、ということなのだ。たしかに何事も起こらなければ、それで問題はない。しかし、ひとたび困り事が生じたらアウトだ。私たちのおつき合いが、助け合いに無力であるどころか、助け合いを阻む障害物になってしまうのである。

⑺「私のことは放っておいて」ということ

まず「助けられる側」から見ると、以下の４項目が該当する。これに〇がつけば、どういうことになるのか、→印で示してある。要するに「私のことは放っておいて」と言っているのだ。これでは周りも、助けの手を出せない。

❶自分や自分の家族のことは隠しておきたい

→それでは困り事が周りに気づかれない。

❷自分のことがご近所で噂されるのはイヤ

→それでは困り事の情報が周りに伝わらない。

❸人に助けを求めるのは苦手だ

→「頼まれたら助ける」のが日本人。これでは手が出せない。

❹人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない

→迷惑をかけたくないと思えば「助けて！」とは言えなくなる。

⑻「あの人のことは放っておこう」

今度は「助ける側」から見てみよう。関連しているのは、以下の４項目。詮索しない、お節介はしない、こじあけもしない。こうなると要するに、「あの人のことは放っておこう」ということだ。

❺人のことはなるべく詮索しないようにしている

→詮索するほどの積極性がないと、人々の困り事は見えない。

❻誰かが認知症と気付いても、だれにも言わないようにしている

→それでは困り事の情報が周りに伝わらない。

❼困っている人には、お節介と言われない程度に関わる

→そんなに消極的な姿勢では、人は助けられない。

❽引きこもるのにも事情があるから無理にこじあけるべきではない

→だから、孤立死が生まれるのだ。

⑼プライバシーは尊重。相手のことは知らないようにしよう

最後は、私たちのご近所づき合いのあり方。

❾お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う

→つまり「あなたのことは放っておきます（助けない）」ということ

❿隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている

→困り事は言い合わない、つまり助け合いをしないご近所関係

⑽助け合いはきれいごとではない、ということ

私たちは助け合いをスマートにやりたいと思っている。しかしそれは、ないものねだりである。助け合いは元々「スマート」からかけ離れた、人間くさい営みなのだ。

人のことを詮索し、困っている人が見つかればお節介を焼く。その相手が引きこもっていれば、押しかけてドアをこじあけてでも助ける。一方で身内に困り事が起きれば、周り人たちにも知ってもらい、支援が必要なら「助けて!」と声を上げて、周りの人のお世話になる。そういう世界だ。これができなければ、助け合いはできないのである。

⑾自分の足元で「助け合い」ができるか？

こうやって見ると、日本人が助け合いが苦手な理由がわかってくる。助けを求めることも、助けてあげることも、両方ができない。だから、自分が助けが必要な状況にいても、周りに助けを求めることができない。隣家で虐待が行われていても、駆けつけることができない。人間の尊厳の危機はこうして、私たちの日常生活の中で頻繁に起きている。なにか事件が起きない限り、それにだれも関われない。法律ならば不作為を問われるところだ。だから、人間の尊厳を守る社会をつくるということは、そういう尊厳の危機が足元で訪れた時に、私たち１人ひとりが素早く行動を起こせるかということに他ならない。

というわけで、尊厳を守れる社会づくりの最も大事なポイントは、一言で言えば私たちが地域社会で、自分の足元で、「助け合い」ができるかという一点に絞られる。これを私達の新しいモラルにしたらどうか。

⑿「しない」型モラルから「しよう」型モラルへ転換

これまでモラルというのは、悪いことは「しない」という禁止事項が柱になっている。しかしこれからはその逆の、人にいいことを「しよう」。ネガティブなモラルからポジティブなモラルに転換するのだ。

問題が解決しない大きな理由が、「しない」ことにある。困っていても助けを「求

めない」。困っている人がいても声を「かけない」。無関心こそが犯罪なのだ。クラスメートがいじめを受けていても、手を「出さない」、先生に報告も「しない」。

⑬「迷惑をかけるな」を変えるのに百年かかる

日本人の資質は、どの面から見ても受け身である。善意を実行するのも「頼まれたらする」「会社に指示されたらする」「みんながやるなら私も」。場合によっては、目の前の困っている人に自分が関わらなくても誰かが関わってくれるだろうという、逃げの姿勢でもあるだろう。逃げの姿勢から攻めの姿勢への転換だ。

しかしこれは、日本人にとっては、とんでもないほどの難題だと言える。なぜならこれは日本の生活文化そのものなのだから。困っている時に助けを求めれば、相手に迷惑がかかる。「人に迷惑をかけるな」は、日本人の最も重視しているモラルなのだ。これを変えるには、普通の努力でも百年はかかる。それを今すぐ修正しなければならないのだから大変である。

詮索やお節介、こじあけも、みんな日本では嫌われる行為だ。今の時代、「プライバシーの尊重」は、特に重視されている。個人情報保護法もできて、誰もが他人のことを知ろうとすることに神経質になっている。自分のことが知られはしまいかとピリピリしている。そういう状態でどうやって助け合いをするのだろう。

「攻めのモラル」7か条

❶自分や自分の家族のことは、周りに知ってもらおう

①何か困り事があれば、積極的にオープンにしよう。

②「知られたくない」と言う家族をみんなで説得しよう。

❷困った時は、周りの人たちに助けを求めよう

①どのように助けてほしいかや、やり易い方法を教えよう。

②助けてもらうことで迷惑がかかっても仕方がない。その代わり、今度は私が誰かを助けよう。

❸周りの気になる人のことは、日頃からよく注意しておこう

①「詮索」と見られないように、さりげなく観察しよう。

②知ったことを誰かに伝える必要があると思ったら、相手をきちんと選ぼう。

❹困っている人がいたら、即刻関わろう

①「お節介」と陰口を叩かれても遠慮しない。

②本人は誰に関わってもらいたいかを優先しよう。

❺引きこもる人には、最後の手段としてこじあけることも

①天性のこじあけ屋さんがいたら、その人にお願いしよう。

②本人は助けを求めていると信じて、遠慮せずに入り込もう。

❻相手のプライバシーを尊重するのも、ほどほどに

①相手のことを知らねば、助けようがない。

②知らないようにするとは、相手を助けないということだ。

③誰にも知らせないのは、誰にもその人に関わらせないということ。

❼隣人とは、助け合えるほどにお互いを知り合おう

①よく知り合うために、お互いに家をひらき合おう。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷１４７６－１
TEL049-294-8284
kiharas@msh.biglobe.ne.jp
http://juminryu.web.fc2.com/